

“恨”原発 佐藤祐禎の歌を読む

歌人・佐藤祐禎（1929-2013）の歌集

『青白き光』（いりの舎H23年再版）から、

原発への想い・警鐘を読んでいきたい。

福島県大熊町に住んでいた農業者ではあつたが、若き頃政治を志向したように、農政に、原発に、想いをぶつけるような時事詠が多い。“人類に課せられた”と言える福島原発事故を予言していた。

水番をしつつ寝転ぶ草土手に

ハルジョオン咲きしろつめぐさ咲く

夜水引くわれのめぐりに幾つかの

蛍の舞へばあかりを消しぬ（昭和62年）

自然を愛で、優しき心根の農夫が、歌集最終にある次の歌を詠むまでの軌跡を訪ねたい。

いつ爆ぜむ青白き光を深く秘め

原子炉六基の白亜列なる（平成14年）

政治を志向しただけに、農政もするどく、

なし崩しに米は自由化されゆかむ

部分輸入と言ふ手法にて（H3年）

農村の実情知らぬ学者らの

片腹痛き論を聞きをり（H6年）

原発に対しては、最初から不信の目で、

原発が安全ならば都会地に

なぜ作らぬとわれは言ひたき

線量計持たず管理区に入りしと言ふ

友は病名なきままに逝く（S63年）

認め難き、されど抗しきれずに、諦めにも似た感情で原発の町を詠み続けた。

原発に漁業権売りし漁夫の家の
薨は光りて塀高く建つ

「この町の魚ではない」との表示あり

原発の町のスーパー店に

原発を知らず反対せざりしを

今にして悔ゆ三十年経て（H元年）

利根川と同水量を吐き出だす

原発排水白く泡立つ

原発依存の町に手刀すでになし

原子炉増設たやすく決めむ

原子炉の寿命知らされざるままに

原発ひしめく町に慣れて住む（H3年）

原発は、被曝労働者の犠牲無くして成り立たないことを、身近な人に見ている。

原発に勤むる一人また逝きぬ

病名今度も不明なるまま

原発はつひに被曝を認めたり

三十一歳にて逝きたり人に

原発の管理区域に働ける

人らは痩せて目のみ光れる（H6年）

労災認定されずに闇に埋もれた労働者は
どれだけ居たであろうか。そうした現実
を出来るだけ巧妙に隠す、国・電力会社
である。倫理から言っても、人間も国家
も蝕むことを知らねばならない。

『いつ爆ぜむ・・・』となると、この
労働者を蝕んだ『管理区域』が、何十
キロ圏へと、広がる。福島第一の今の
現実である。

原発への不信は、「大惨事を惹き起すに
違いない」との確信を持つまでに至る。

地震には絶対強しとふチラシ入る

不安を見透かすごと原発は

断層帯に火発原発犇き合ひ

チエルノブイリのよそごとならず

ウランさへ信じられぬをプルサーマル

この老朽炉に使はむとする

自然界になかりしプルトニウム作りたる

人間は死もて償はされむ(H6〜8年)

原発は勿論、その事業者、国への不信は、H14年の組織的隠蔽事件で極点まで達した。元々無理なことを進めることは、嘘で固め、事故あらば隠し、対処は、お座成りとなる。必ず起きる事故、原発の邪(よこしま)な金が、閉じ込められぬ放射能が、働く者を、住民を、故郷を、国を、民主社会を蝕み続けるのである。義憤の歌が続く。

微量とはいか程のものかいつにても

漏れたるときの彼らの言葉

町議二人社員より出しし原発の発言

いよと強くならむか (H8年)

破損また部品交換不要と言ひたるを

今原発のかくも脆弱

ひび割れを無修理に再開申請と言ふ

かかる傲慢の底にあるもの

法令違反と知りつつ告発に踏み切れぬ

保安院は同族と認識あらた

原発推進の国に一步も引くことなき

知事よ県民はひたすら推さむ(H14年)

最期の砦として頼りにしていたのが、佐藤栄佐久、当時の県知事であった。しかし、彼は、奇妙な冤罪で失脚させられてしまった。彼曰く「我が国は、原発帝国と化した。」と。戦時中の特高、独ナチスのゲシュタポを思い起こす。今では、拷問やら、闇に葬ることはないが、国家は、総力挙げてひとりの社会的生命を絶った。プルサーマルへの道を敷いた時の出来事である。

既述通り、原発は、日本を蝕んでいる。そして蝕み続けるであろう。このままでは、民主国家の体を成さなくなる。断じて許してはならない。

平成16年初版「あとがき」から抜粋改ざん

・75歳にして初めての歌集、歌集名は『青白き光』とした。東海村の臨界事故、この地区もいつ爆ぜるかも知れない、との想いから。

・わが町大熊町の6基、隣り富岡町の4基、九百万kw、全ては首都圏に送られ、。

・その誘致に当たつての深い悔恨が、。

全く無知だったが故に、特に遅れている

地方故に、経済効果との言葉に踊らされ

・実際に起こつた限らない小事故の連続、

平成8年の羽根車破断事故、平成14年の

組織的事故隠蔽事件、全10基の運転停止に至つた。が、それでも、。

平成23年「再版によせて」から抜粋改ざん

・世界のどこかで必ず事故は起こると確信していたが、かく言う私の地元とは、

・家族は皆バラバラ、息子夫婦は二人の孫

と、私と妻は高校生の孫を通学させるに、

ここいわきに市に陋居。

平成25年3月12日 メルトダウンしたその

日からちやうど二年後に、避難先いわき

市で穏やかならぬ最期を、無惨にも千人を

超える原発関連死のひとりとして迎えた。

死の町とはかかるをいふか生き物の

気配すらなく草の起き伏し(平成23年秋)

佐藤の歌を、想いを、我ら決して忘れまじ。